

1. はじめに

魅力的な景観を有している地方の歴史都市の代表として、小京都と呼ばれている都市がある。これらの都市は古都京都のように周囲を山で囲まれ、市中を清流が流れていることから山紫水明の地といわれている。また、市街地は町家や社寺などによって歴史的な町並みを形成しており、しっとりとした魅力的な雰囲気を醸し出している。

そこで、本研究では代表的な小京都¹⁾である秋田県角館町、福井県大野市および岐阜県高山市において住民を対象とした調査を実施し、各都市の小京都らしさや景観整備事業に対する住民の考えを把握すると共に、景観保全施策との関係を分析することにより、小京都らしさの魅力を解明するものである。

2. 調査の方法と内容

調査はそれぞれ角館が1998年7月、大野が1998年10月、高山が1999年10月に実施した。調査方法は各都市の住宅500戸を対象として、1戸当り3票のアンケート用紙を入れた封筒を無作為に配布し、郵送による回収とした。調査票の回収状況は表-1に示すとおりであり、高山の回収率が他の2都市より高くなっている。また、調査の設問内容は個人属性、小京都らしさ、小京都らしさを演出する景観要素及び景観整備事業などに関する項目である。

一方、3都市において制定されている自然・市街地に関する景観保全施策および実施されている景観整備事業などに関する事項を個別に調査した。

表-1 アンケート調査の回収結果

	角 館	大 野	高 山
配布数	500通	500通	500通
回収数	87通	80通	140通
回収率	17.4%	16.0%	28.0%
有効票数	187票	162票	281票

3. 調査の分析結果

(1) 住民が感じている小京都らしさ

住民が感じている小京都らしさの程度については、角館と高山の両都市の傾向はほとんど同じであるが、大野については「あまり持っていない」が30%を超えている一方、「非常に持っている」が10%と低いことから、住民からみて大野は他の2都市と比較して、小京都らしさをあまり持っていないことがわかる(図-1参照)。

(2) 小京都らしさを形成する景観要素

小京都らしさを演出している景観要素を明らかにするため、「山」「川」などの6つの景観構成要素を第1位から3位までの順位付けによる回答を求めた。順位付けを生かすため、第1位選択は5点、2位選択は3点、3位選択は1点とウェイト付けを行い、それぞれの選択数に乘じた値を景観要素別に合計し、都市別の構成率を示したものが図-2である。これをみると

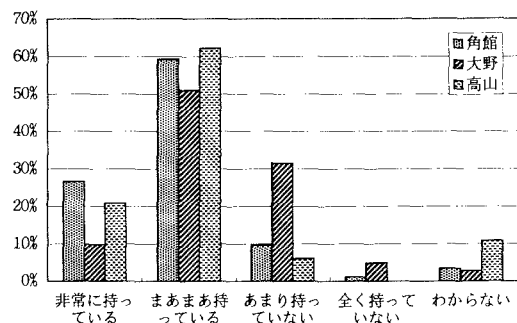


図-1 住民からみた都市別的小京都らしさ

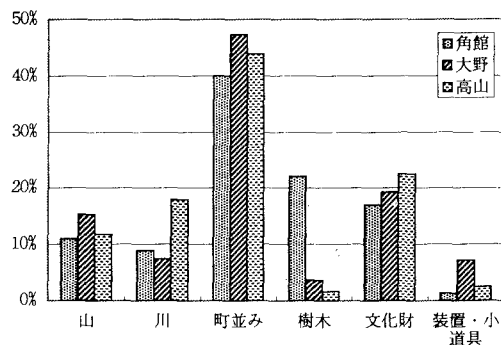


図-2 都市別にみた小京都の景観構成要素

表－2 景観整備事業に対する住民の認識

	角 館	大 野	高 山
実施を知っている	75.0%	59.9%	79.1%
実施されていない	2.3%	8.0%	2.9%
わからない	22.7%	32.1%	18.0%
計	100%	100%	100%

表－3 景観整備事業に対する住民の評価

	角 館	大 野	高 山
非常に良くなった	14.2%	2.1%	14.7%
良くなった	73.5%	71.6%	70.2%
変わらない	11.0%	25.3%	11.4%
悪くなった	0.0%	1.0%	2.3%
非常に悪くなった	1.3%	0.0%	1.4%
計	100%	100%	100%

表－4 今後の景観形成事業に対する住民の意見

	角 館	大 野	高 山
積極的な整備	31.6%	19.7%	31.0%
ある程度整備	54.4%	64.3%	48.6%
最小限の整備	12.3%	13.4%	18.6%
整備の必要なし	1.7%	2.6%	1.8%
計	100%	100%	100%

3都市とも「町並み」の割合が高く、「文化財」がこれに続いている。一方で、角館では「樹木」、高山では「川」が他都市よりも高率であることから、角館の屋敷林、高山の宮川が小京都らしさを構成するうえで重要な役割を担っていることがわかる。

（3）景観形成事業に対する認識

景観形成事業に対する住民の認識は、表－2に示すように高山の「知っている」と回答した人の割合が角館より若干高かったものの、ほぼ同様の傾向を示している。一方、大野市民の「知っている」と回答した割合は他の2都市と比較して低いことから、大野市民は他の2都市よりも景観形成事業に対する認識程度が低いことがわかる。

（4）景観形成事業の評価

景観形成事業の実施を知っていると回答した人の事業後の評価は、「非常に良くなった」と「良くなった」を加えた数値は3都市とも70%を超えており、景観形成事業に対して一定の評価をしていることがわかる。この中で、「非常に良くなった」と回答した人の割合は角館と高山では14%台とほぼ同数値であるのに対し、大野では2%と低く、大野市民の評価は他の2都市より低いことがわかる（表－3参照）。

（5）今後の景観形成事業の実施に対する考え

今後の景観形成事業に対しては、「積極的に整備すべきである」と「ある程度の整備は行うべきである」といった整備を容認する人が3都市とも約8割を占めている。しかし、その内訳をみると、大野の積極的整備は約20%で他の2都市より10%程度低くなっている（表－4参照）。このことから、大野市民は他の2都市と比較すると、景観整備を容認しながらも積極的な整備はあまり望んでいないことがわかる。

4. 景観保全施策と景観整備事業

3都市において制定されている自然景観および市街地景観に関する保全施策と、景観整備事業の実施状況、さらには景観表彰制度の有無について調査したものが

表－5 都市別の景観保全施策と景観整備事業

	角 館	大 野	高 山
自然景観	———	———	・緑地保全地区 ・風致地区
市街地景観	・伝統的建造物群保存地区（6.9ha）	———	・伝統的建造物群保存地区（3.5ha） ・市街地景観保存条例（27.2ha）
景観整備事業	・歴史的地区環境整備街路事業	・越前大野歴史の路整備事業	・歴史的地区環境整備街路事業 ・まちかど整備事業
景観表彰制度	———	・大野市景観賞	・景観デザイン賞

表－5である。これによると、高山では自然および市街地景観の保全施策、景観整備事業並びに景観表彰制度の全てを網羅しているが、角館と大野では自然景観の保全施策が指定されておらず、大野においては市街地景観の保全施策についても未指定である。とくに、小京都らしさを演出する景観構成要素の主なもの町並みであることから、角館と高山では伝統的建造物群保存地区の指定がなされていることが、小京都らしさの高い評価に反映しているものと考えられよう。

5. まとめ

本研究では、角館と高山の住民は当該都市に対して大野市民より小京都らしさを強く感じており、その景観要素は町並みを中心として、角館では屋敷林、高山では宮川といったそれぞれの都市特有の要素が小京都らしさを構成するうえで重要な役割を担っていることがわかった。また、景観形成事業に対する住民の認識や評価については、角館と高山の住民はほぼ同じ傾向であるのに対し、大野市民の認識率および評価、さらには今後の整備方針に対する考えは異なっている。このような結果は、自然景観や市街地景観を保全する施策の有無と密接に関係していると考えられる。

【参考文献】

- 1) 和田章仁,材野博司：小京都における景観保全と景観意識、土木計画学研究・講演集,21(2),pp.165-168,1998.